

東京国立博物館

金剛力士立像

Guardian Gods

Buddhist mythology tells of fearsome guardians who defend the Buddha and his sacred teachings. The massive guardian gods shown here are avatars of Vajrapāṇi (The Holder of the Thunderbolt), the Buddha's supernatural protector.

These guardians originally stood at the entrance gate of Rendaiji, a Buddhist temple located northeast of Kyoto. Their muscular bodies, dynamic poses, and fearsome expressions were intended to repel the enemies of Buddhism. One guardian's mouth is open while the other's is closed, symbolizing the beginning and the end of the universe. The guardian on the right raises a vajra "thunderbolt" weapon. Despite its small size, it possesses the power to destroy evil and delusion.

金剛力士は仁王（二王）ともいい、阿形と吽形の一对からなる仏教の守護神です。一般的にお寺の入り口にある門の左右に立って仏堂や敷地内を守ります。

東京国立博物館の金剛力士立像は、平安時代後期に作られた貴重な像です。この像もかつて門に安置されており、災害などで度重なる損傷を受けてきましたが、修理を繰り返し、多くの人びとの手で大切に守り伝えられてきました。高さ三メートル近い圧巻の姿や、金剛力士ならではの力強い造形をぜひご覧ください。

金剛力士立像

二軀 木造 彩色 平安時代 十二世紀
〔阿形〕 像高二七九・〇
〔吽形〕 像高二七五・五

Guardian Gods

Two sculptures
Heian period, 12th century
Wood with pigment
Guardian God with His Mouth Open: H. 279.0
Guardian God with His Mouth Closed: H. 275.5

口を開き、目尻を吊り上げた鋭い眼差しが阿形。振り上げた左腕から外側に張り出した腰を経て、力を抜いて遊ばせた右脚にいたる各部のつながりがスムーズで、しなやかな身のこなしが優雅な印象を与えます。風をはらんで翻る衣の表現も見事です。

阿形



吽形



口を閉じ、堂々とした目つきで見据える吽形。右肩をいかにせ、手を前方に突き出した上半身や太づくりな下半身などに武骨さを感じられます。体や衣の動きを抑えてどっしりと構えて立つ姿勢が示す重厚感が特徴です。

来歴と修理

かつて滋賀県栗東市にあった蓮台寺（現在は廃絶）の門に安置されていたが、昭和九年（一九三四）の室戸台風の被害を受け、門とともに倒壊して大破し、修理もかなわず部材の状態のまま保管されていました。昭和四十三年（一九六八）に彫刻の修理を手掛ける美術院（現公益財団法人美術院）が研究資料のために購入し、部材を仮組みした状態でしばらく京都国立博物館で保管されていました。その後、約二年をかけて本格的な修理が行なわれました。

いったんすべての部材を解体し、ひとつずつ位置を確認してつなぎ合わせ、表面の彩色も補修を行なうことで、かつての力強い姿を取り戻しました。令和四年（二〇二二）二月に当館が収蔵し、同年の特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」で公開しました。

背中に現れる時代性

通常、金剛力士像は門の中に安置されるため、背面を見ることができません。東京国立博物館の金剛力士立像は、正面から見ると筋骨隆々の力強い姿が印象的ですが、背中は思いのほか肉付きがよく柔らかみを感じられます。下半身の衣の襞の数も少なく、簡潔な表現である点は、平安時代後期の特徴です。



卍形 修理中（解体）

東京国立博物館 YouTube チャンネルで
金剛力士立像の魅力を紹介中

「仁王像 ざっくり知る！」
東京国立博物館の金剛力士立像」
<https://youtu.be/SxVvC4nrGpY>

